

# 各時代を生きぬいた、 名も知れぬ人々への共感を！

Miyataki Koji .....

宮瀧 交二

**私**の毎年4月の「日本文化史」の第1回目の授業のエピソードから御紹介したい。受講してくれた学生たちに、まず最初に、明治・大正・昭和に生きた人物の名前を挙げて下さいと尋ねると、夏目漱石、樋口一葉、野口英世などといった答えが返ってくる。次に、空欄にした系図を配り、両親、祖父母、曾祖父母の名前を記入してもらおうと、4人いる祖父母の名前が全て書けない学生もいるし、8人いる曾祖父母の名前にいたっては、ほとんどの学生は空欄のまま、曾祖父母の名前を1人でも書ける学生はまれである。そこで私は、どうして、漱石や一葉のことを知っているのに、自分の身内のことを知らないのかと問いかけることから一年間の授業をスタートさせる。そして、3代前の曾祖父母は8名だが、10代前まで遡るとその数はなんと1024名になり、この1024名は、歴史の教科書には登場こそしないが、それぞれに立派な人生を送り、それぞれの時代を生き抜いたので、皆さんが今ここにいるのではないかと畳みかけると、学生たちの目の色が徐々に変わってくる。

## 名も知れぬ人々への共感

さて、『ともに学ぶ人間の歴史』の原始・古代(旧石器時代から古墳時代)に登場する特定の人物名は、わずかに卑弥呼とワカタケルだけである。こうした特定の人物名が登場しないと、何となく生徒たちはその時代に対するリアリティを持ちがたいのではないと思われる。ところが、この教科書では、人物名こそ登場しないが、生徒たちが旧石器時代・縄文時代・弥生時代・古墳時代に暮らした人々の息吹を感じ、それぞれの時代を「他人事ではない歴史」として実感できるような装置が随所に配置されている。

厳しい自然環境の下でナウマンゾウなどのわずかな獲物を追いながら移動生活を続けざるをえなかった旧石器時代の人々、豊かだった自然に全面的に依存していたため、安定した生活と一歩間違えると死に至る厳しい局面が表裏一体であった縄文時代の人々、稲作の導入に伴うより豊かで安定した生活の追求から、時にはムラとムラとの戦闘をも余儀なくされた弥生時代の人々、そして火山噴火等の自然災害に見舞われながらも、安定した生活を追求するために、より広域な政治的・経済的な関係を築き、ついには国家形成への道を歩み始めた古墳時代の人々、こうした名も知れぬ人々への共感がこの教科書を用いた授業を通じて自然と生まれてくるであろう。

## 歴史を学ぶ目線

かつて夏目漱石は、長塚節の小説『土』に寄せた文章の中で、その登場人物たちを「蛆同様に憐れな百姓の生活」と評した。そこには、自分と同じ時代を生き、同じ空気を吸っている茨城の農民を同じ目線で見つめようとする姿勢はなく、彼らへの共感も存在しなかった。これに対してこの教科書で学ぶ生徒たちは、それぞれの時代を真剣に生き抜いた自分たちの祖先の姿を具体的に学び、かれらと同じ目線で社会・時代を考えることの大切さに気が付いてくれるのではないかと期待する。

またこのことは、この教科書が生徒に歴史を教える先生方の力量が問われる教科書であることも意味している。まずは先生方御自身が、各時代を象徴する特定の人物にフォーカスをあてるのみならず、その背景に存在した圧倒的多数の人々の生き様(ざま)にも目を向け、彼らの息吹を感じて下さることを期待したい。